



半村良

講談
碑いしづみ
夜十郎やじゅうろう

下

講談社
文庫

こうたん いしふみや じゅうろう
講談 碑夜十郎(下)

はんむら りょう
半村 良

© Ryo Hanmura 1992

1992年4月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185163-2



講談社文庫

講談 碑夜十郎 (下)

半村 良

講談社

目次

狐塚時白浪

七

名医山井養仙

一二五

御供先血祭坊主

一五七

上州屋姫人質

一九〇

修紫田舎巨人

二二五

古玉川長屋手習

二六〇

根津権現俄剣戟

二九五

跡始末目白禁山

三四一

講談こうだん

碑いし
夜よ
十じゅう
郎ろう

(下)

きつねつかとまのしらなみ
狐塚時白浪湯島天神境内。
けいたい

石の大鳥居とその左右に石の獅子。同じく奉納の石燈籠。上手に竹矢来の小屋があつてそれへ定紋付の幕が張り廻してある。

入口に、「天満宮奉納剣術試合。催主金子市之丞」と記した木札を立て、下手には水茶屋。「御憩所」という掛行燈に軒提灯があつて床几が二、三脚。そこに富の札売りの七兵衛と茶屋女のおせんを中心に、閑そうな顔が四人ばかり雁首を並べている。

おせん、水茶屋の奥から盆を手に出て来る。

「さあさあ皆さん、お茶を一つ……」

七兵衛がうれしそうに言う。

「やあ、これは有難いな」

おせん、まず七兵衛に茶碗を渡し、続いて閑人たちのそばへも置いてまわる。七兵衛すぐに茶

をひと口飲んでからあたりを見渡す。

「今日は堀田原の先生がこの天神様へ奉納の剣術の試合があるので、此の御社内ごしゃないも思わぬ混雑。おかげでこのわたしも富の札を大層売りましたよ」

七兵衛と顔見知りらしく、閑人の一人が言う。

「堀田原の先生は当節江戸で名人と言われる剣術遣いだが、侍の癖くせに喧嘩早く達者な腕で暴れるから、一時はみんな、それはこわがっていたもんさ」

七兵衛は大きく頷うなずいて茶碗を置く。

「そうそう。それというのもあの先生は、表二番町の青鬼とつるんでいなすったからですよ。火付盗賊改め方の永井五衛門がうしろについていれば、あの腕うでなもの、それこそ鬼に金棒。ところがどこでどういう風が吹いたものか、それがいつの間にか鬼退治の側に廻まわって……」

「そうだってなあ。碑いし夜十郎よじゅうろうとか言うお侍と手を組んで、あの青鬼に痛い目を見せてくだすったと言うから大層なもんじゃないか」

別な閑人が訳知わけしり顔をひそめる。

「そのことだが、青鬼退治の裏方にはもう一人、あの練塀小路ねりべいこうじの……」

そのとき上手から出て来たのが河内山宗俊かわうちやまそうしゅん。

「しっ……噂うわさをすれば何とやら。河内山のおでましだぜ」

七兵衛は素早く立ちあがると小走りに河内山のそばへ。

「これはこれは河内山さま。本日はよいお日和ひよりで」

「おう、七兵衛さんか。どうだ、富の札は売れるかい」

「はいもうおかげさまで、今日はばかにはかどりました」

「そいつはよかった。金子市の奉納試合も、思ったより見物を集めているようだな」

「もう大変な評判でございますよ。何せあの青鬼……いえその、悪者をこらしめてくださったお方というので、何をおいてもこれは一目見なければと、遠い所からも弁当持ちでやって来ているようでございます」

「そいつはよかった。なに、俺も大方そんなことだろうから心配は要らぬとは思っていたが、この上天氣に誘われてつい足がこっちに向いてしまったのさ」

「別にきまった木戸銭もお取りになりはしませんが、それでもたいがい一人あたまで二朱くらい、あそこへ置いて参るようで」

「百疋くらいで金子市の剣術が見られれば安いものだな」

「ついでに手前の富の札を買って行ってくださいます。天神さまのご利益はあらたかで」

「そう言われると何か催促されているようだな」

宗俊は袖を探ってこまかいのを取り出す。

「はい、毎度有難うございます」

「毎度と言うが、今まで七兵衛から富の札を買って一度も当たったことがないぞ」

「そういつもいつも当たっては他の者の楽しみがなくなります。まあ、今度はきつと当たるでしょう」

「こいつはまた、随分と気のねえ言いかただなあ」

「一枚が二朱と四百文でございますが、今日は特別に口銭こうせんなしで二百文おまけ申して置きましよう」

「二朱と二百か。それなら四枚ももらつておこう」

「それはまた有難うございます。せいぜい当たりそうなのを差しあげましょう」
七兵衛、宗俊に富の札四枚渡す。が、急に宗俊のうしろを見て怯おびえた様子だ。

「どうした」

と宗俊。

「いえ、なに別にその……ではどうかごゆっくりと」

七兵衛は茶屋のほうへ去る。

小心な富の札売りが逃げ出すわけだ。宗俊のあとから現われたのは、鬨どくろ腰こしの紋付に十番馬乗じゅうばんうまのり袴はかまの浪風達之介なみのり。

「なんだ、浪風の旦那だったのか。道理で七兵衛が怯えたわけだ」

「俺は嫌われ者さ」

浪風はふところ手の儘まま苦笑する。

「金子市の試合ぶりを見物に来なすったのか」

「そうだ」

「どうだね、ひとつ飛入りでやって見ては」

「それも悪くないが、銭にならぬのではな」

「なるならやるかね」

浪風はニヤリとして見せ、

「ま、とにかく中へ入ろう」

と木戸へ入る。

金子市の門弟達が一斉に警戒の色を示すと、続いて入る宗俊がなだめた。

「まあそういきりたちなさんな。この鬨の且那も金子市とは兄弟分のようなものだから」
宗俊は楽しそうに笑った。

二

同じく湯島天神へ向かう花房お絹。傍に従うはお馴染みの平助である。

「何ともまあいいお日和で、金子市ほどの悪党にしちゃあ勿体ないくらいですぜ」

平助は冗談半分にそんなことを言っている。

「悪ときめつけちゃ金子市が可哀そうだよ」

お絹は微笑を泛べていた。

「元締さん、こんにちは」

通りがかった家の戸口から女が飛び出して来て挨拶する。

「おや、元気がよさそうじゃないかね」

「おかげさまで……なに、あんな風邪なんぞでそういちいち長く寝込んでいたまるものです。これでもれっきとした貧乏人ですからね」

「れっきとした貧乏人はよかったね。でもまあ、起きて働けば何よりさ」

「今日はどちらへ……」

「大した用もないけれど、湯島天神の境内で剣術の奉納試合があるというんで、これからちよつと見物して来ようと思ってね」

「聞いてます、聞いてます。堀田原の金子先生がなさるんでございましょう。あの先生もてつきり悪旗本連中の仲間かと思っておりましたのに、表二番町にたてつこうという勇ましいお方だったとは、本当にびっくりしてしまいましたよ」

「おや、そうかね」

「そりやもう堀田原の金子先生と言えば近頃は大層な評判で、それに何だかこう、よく見ると苦味^みばしつたい男だそうで……」

「よく見れば、というところがいいじゃないか」

お絹は平助と顔を見合せて笑った。

「何とか言う絵描きが一枚絵にしようかって版元と相談してるそうですよ」

「およしよ」

お絹はふきだした。

「いくら苦味ばしつたって、錦^{にしきま}絵にしていはいほどの男前じゃあないさね」

お絹の高笑いを横目に、跼りの平助が真顔まがほになって腕を組む。

「こいつはちよいとした騒動さわどうだなあ」

「おや平助、何を鹿爪しかづめらしい顔をして」

「いえね、ちよいと心配になったんですよ」

「何の心配さ」

「金子市の先生のこつてさあ。一枚絵にして刷られたりしたら、困るんじゃないですかい」

「まさかお前、そんなことが本当になりはしないよ」

「でもこう評判が高くなっちゃあ、もののはずみってこともありますぜ。ひよっとして一枚絵になつてそこの店先にぶらさがったりしたら……」

「平助も案外心配性なんだねえ。そんな人の疝氣せんきを氣に病やんだところではじまらないよ。じゃああたしたちはちよいと湯島へ行って来るからね」

お絹はそう女に言い残してまた歩きはじめた。

「下総流山しもさげりやまの造り酒屋の三男坊。はじめっから侍じゃねえし、そう良いこともやって来ちゃいねえ。そいつが絵にされたら、さぞかし困ったことになりましようねえ」

お絹が取り合ってくれないので、平助は少し不服そうだった。

「安心おし、版元だつて商売さね。金子市の絵姿が売れるものか売れないものか、よく考えてごらんよ」

「そうかなあ」

「まだ心配してるよ」

お絹はまた少し笑う。が、すぐにこれも真顔に戻った。

「そりゃ、絵にされることはまずあるまいが、こうしてあの一件にからんだ者の評判が高いのも、それだけ青鬼が憎まれていたという証拠なんだねえ」

「そうですよ。みんな青鬼を嫌い抜いていたからこそ、碑の旦那や金子市、それに河内山なんかのしたことで溜飲りゆういんをさげているんですあ」

「何かまた起らなければいいのだけど」

「あれ、今度は姐御あねごが何かご心配で……」

「そりゃそうさ。町へ出て見なければ判らないけど、こうやって歩いて見るとうちの旦那や金子市の評判は、肌に痛い程よく感じられるじゃないか。……それもこれも青鬼憎さから、となれば、同じようにこの評判を聞いている上役人かみやくにんはどう思うだろう」

「役人だって青鬼には閉口へいこうしてたんではさあ」

「お前の言うのは下っ端はっぱのことさ。あたしはもっと上つ方うえかたのことを言っているんだよ」

「上つ方の……」

「そう。いいかい、この大評判おおひやうばんはつまるところ青鬼、火盜改め方永井五衛門かとうかへいに向けられた唾つばとおんなじことじゃないか」

「そうですよ」

「見なね、そうだろう。だとしたら、融通ゆうずうのきかない上のほうの石頭はどんな風に思うね。しも

じもはご政道に唾つばしている、って」

「あ……違えねえや。たしかにそういう風に考えるかも知れせんぜ」

「青鬼の失態はたしかにどうしようもない、ありのままのことさ。ありのままに知れ渡りすぎて、どうにも細工のしようがないんだよ。お上かみじゃあそれがくやしくなって仕方なからうじゃないか」

「大きにその通りでしょうね」

「青鬼のドジも憎いが、そこはそれ、同じ侍同士だしさ」

「へえ」

「もっと憎たらしいのは、青鬼にドジを踏ふまして手柄て顔がしている不逞ふていのやつばら」

「ちょっと待っておくんなさい。碑の旦那をはじめ、誰一人そんな手柄て顔がなんぞしてやしねえですよ」

「してなくったって、上つ方から見ればそう見えるんだもの仕様がなからうさ。町方まちかたの者がみんなして、えらいだの凄すごいだのともてはやしていれば、それがもう癪やくの種……何とかしてあいづらの天狗鼻てんぐばなをくじいてやらなければ、お上かみのご威光きこうにもかかわると……」

「忠義づらした窮屈きうくつ袋ふくろがしゃしゃり出るってわけですね」

「心配なのはそのことさ。うちの旦那は天下一い人だけど、お前もよく知っての通り、以前のこととは何一つ思い出せない不思議な病やまい。その上どうやらこの世に生まれた人間じゃないなんてことになれば、金子市どころの騒さわぎじゃなくなるよ」